学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１３年１０月１２日
文責：ＪＵＮ

読みの深まり（学びのジャンプ）を仕かける

１　子どもはほぼ読めている

文学を読む醍醐味は、自分に読めていなかった読みが生まれ、そのことによってその文学の世界を心から味わうことのできたときに生まれます。そうすると、文学の授業は、子どもがすでに読めていることを発表させる発表会のような授業になったのでは、子どもに文学の醍醐味を味わわせることはできないということになります。大切なのは、子どもが読めていること、子どもが感じとっていることをベースに、どこまで読みを深めることができるかです。この深めるということが、他の教科との関連で言う「学びのジャンプ」ということになるわけです。ただし、以前にも述べたように、深まりという感覚は、高さや距離を目指すジャンプとはそぐわないように思われます。しかし、今は、そのことは一旦横に置いて、文学の読みのジャンプは読みの深まりだとして考えることにします。

それは「おとうとねずみ　チロ」（もりやま　みやこ　作）の授業でのことでした。

この物語は、三匹のねずみのきょうだい、その末っ子のチロのお話です。三匹のところにおばあちゃんから手紙が届きます。それはおばあちゃんが赤と青の毛糸でチョッキを編んでいるので楽しみに待っているようにという内容でした。兄さんねずみは「赤がいい」と言い、姉さんねずみは「青がすき」と言います。毛糸の色はその二色だけ。それで「チロのは　ないよ」と言われてしまいます。チロは心配になるのですが、字を知らないチロにはおばあちゃんへの手紙は書けません。そのときチロはいいことを考えつきます。チロは外へ飛び出し、丘の上の木の枝ののぼり、そこから「おばあちゃん」と呼び掛けます。すると、「おばあちゃあん」という声が繰り返し響いていくのです。チロは、「ぼくの声がとんでった。おばあちゃんちへとんでった。」と言ってさらに大きな声で、「ぼくにもチョッキあんでね」と呼びかける、そういう話です。

この日の授業は、チロが丘の上の木の枝からおばあちゃんに呼び掛ける場面を読んでいました。

入学してまだ半年の子どもたちですが素晴らしいのです。しっかりと顔をあげて学びに向かっています。その姿勢、教師のことばに反応して変わる表情、教師の問いかけにしっかり答える声、物語の味を感じさせる音読、どれをとっても心洗われる思いでした。

その子どもの前に立つ教師がまたいいのです。最初から、おだやかに、そして微笑みをた

たえて子どもに語りかける、それだけで物語を読む雰囲気いっぱいという感じでした。子どもたちの素晴らしさはこの教師の雰囲気から生まれている、わたしは、そう感じていました。

わたしは、最初の音読を聴いたときから、すでに子どもたちは場面の様子の大体が読めていると思いました。それは、教師の「チロはどこにいるの？」という発問に、さっと「丘の上の木の枝」と答えたことや、「おばあちゃあん、おばあちゃあん、おばあちゃあん、おばあちゃぁん……」と繰り返されることばを、次第に声を小さくしていくように音読していたことなどからそう感じたのでした。つまり、チロは、木の枝からおばあちゃんにチョッキを編んでくれるように大きな声で呼びかけたそのいきさつは、ほぼわかっていたようなことだったのです。

その状態の子どもに対して、どう授業するか、それがこの時間でもっとも大切なことになりました。その深まりが出ない限り、授業をする意味が感じられないし、子どもに学ぶ楽しさを感じさせることができないからです。それは、まさに「文学の読みの深まり」つまり「学びのジャンプ」をどう生み出すかという、多くの教師が突き当たっている課題だったわけです。

２　まだ読めていないことから深まりが

本稿の冒頭、読みの深まりは、まだ読めていなかった読みが生まれたときにすがたを現すということを述べました。わたしは、授業を見ながら、この子どもたちがまだはっきりと読めていないことで、それを読むことができればこの物語の読みが素晴らしく楽しくなるものはないかと考えました。そしてそれが、ある子どもの発言とテキストの読みの接点から姿を現しました。

教師は、音読の後の最初の問いで、「今、チロはどこにいますか？」と問いかけました。わたしは即座に「チロの家の中だ」と思いました。けれども、子どもは、「丘のてっぺんの木の上」だと答えたのです。教師はそれを受けて、そこから「おばあちゃあん…」と呼びかけるチロの行動の読みに舵を切りました。わたしの気づきは、わたしと子どものその食い違いから生まれたのです。

チロは、自分だけチョッキを編んでもらえないのではと心配だったのです。そして、手紙を書けないチロは、突然「そうだ、いい　こと　かんがえた」と言います。その場面こそ私が考えたチロの家の中なのです。ということは、子どもの意識からそこがこそっと抜けていることになります。その抜けているところに、子どもの読みを深める大切なものがある、そうわたしは気づいたのです。

チロが考えついた「いいこと」とはどういうことだったのでしょうか。わたしは、それを問わなければならなかったと思いました。そのことを読むことはさほど難しいことではありません。子どもたちももう読めていることでしょう。丘の上の木の上からおばあちゃんに大きな声でお願いする、それがチロの考えついた「いいこと」に違いありません。しかし、そ

れをはっきりさせることからまだすがたを現していない読みが生み出せるのです。

チロは「いいこと」を考えつきました。ですから「その通りになりましたか？」と問いかけて、この場面を、音読をして描きだすのです。そうすればどうなるでしょうか。子どもたちは、「まあ、どうしたことでしょう」「だんだん　だんだん　とおく　なって　いくでは　ありませんか」という文に出合うことができるでしょう。そして、予想以上のことが起きたことにきっと気がつくはずです。それはチロが考えた「いいこと」以上の展開だったからです。

つまり、自分の発した「おばあちゃあん」というひとことが、繰り返し響きながら遠ざかっていく、それがまさに、声がおばあちゃんのところに飛んでいくように思える、そういうことになるとは思っていなかったのです。それはチロの想定以上の素晴らしいことだったのです。そこまで、子どもは厳密に読んでいなかったでしょう。だから、「いいこと」をきっかけに、どんなことが起きたのかを描き、それが予想以上のことになったということに気づかせることができるのです。

もしかすると、そのことに気づくことがそんなに大切なことかという疑問を抱く人もいるかもしれません。でも、わたしは、これはとても大切なことだったと思っています。それは、この後のチロの言動にすべて表れています。「『ぼくの　こえが　とんでった。おばあちゃんちへ　とんでった。』チロは、うれしがって　とびはねると、まえよりも　こえを　はり上げていいました。」というチロのことばと行動は、その予想外のことから生まれたチロの喜びなのです。

それが読めたら、子どもたちの読む楽しさは倍増するでしょう。そして、チロの予想外の言動を想像し、その想像から、チロになったようにうれしくなり、「とんでった」を二回繰り返し、「とびはね」、前よりも「こえをはり上げる」という文章の読みに実感がこもるようになるでしょう。

そう考えると、わたしがここで示したようなことが読めているのと、読めていないのとでは大きな違いが生まれるということは明らかです。子どもの読みの状況をよくみて、その子どもの状況だからこその手を打つ、そこに読みの深まりの鍵があるのです。

３　読みの深まりを可能にするには

この文章を読んでいただいた皆さんには、具体的な事例をお示ししたことできっと感じていただけたことだと思います。読みの深まり（学びのジャンプ）を仕掛けるために大切なこととはどういうことかについて。

まず、数学・算数のように、授業前から「ジャンプ問題」を用意しておいて、それを子どもに提示するというやり方は、文学の授業の場合はそぐわないということです。読むのは子どもです。ですから、その子どもの読みに教師は寄り添いながら、深まりを探っていかなければなりません。ということは、授業のその場になって、子どもとともに読むなかで、判断することになるということです。

子どもはどこまで読めているか、もちろん子どもによって個人差がありますから、それも勘案しながら判断するのです。そして、授業の後半、もうほぼ読めていることをくどくどや

っても、手を変え品を変えして時間をつぶしても、子どもの読みは深まらないということを自覚しなければなりません。

そして、そこから、何が読めていないのか、それは、教師の読みをわからせるということではなく、テキストに触れることによる子どもの読みの可能性を見定めるということになります。いまどういう状態かからその先をみることになるのです。そのとき、必要なのが、教師の読みの力です。テキストが読めない人にはそれを見つけることはできません。子どもが見えている人、そしてテキストが読める人が、深まりのきっかけを見つけることができるのです。

次に、授業をしながらそのことに気づいたとしましょう。そこから考えなければいけないのは、それをどういうふうに子どもの中に持ちこむかということです。どう問いかけるか、そこで、テキストの文章に触れさせる音読をどう入れるか、ペアを入れるのか、一人で考えさせるのか、書かせるのか、どうすれば、子どもがインパクトを持ってそれを受けとめられるのか、その判断をするのです。

授業の終盤は、子どもの深まりの時間帯のはずです。それがそうなっていない授業がかなりあります。それは、深まりやジャンプの手が打てないことに起因します。

その課題に直面して模索しておられる先生方に、一つの事例としてお届けできるのは、素敵なクラスを作って、私に見せてくださった先生のおかげです。あんなに素直に学んでくれた子どもたちのおかげです。私たちの課題は、そういう実践の具体的事例をもとに思考することからしか克服することはできません。そういう意味で、本当にありがたいことでした。

１０月例会におけるサプライズ演出で、わたしは、ことばにならないほどの幸福感を味わわせていただきました。

アイディアを出して準備をしてくれた人がいます。そして、当日、その企画に賛同して協力してくれた何人もの人がいます。それがすべて、わたしのために行ってくれたのです。その瞬間は、何が起こったのかとおどろいてしまい、ことばもなく立ちつくしましたが、後からじわじわと喜びがわきました。そして、その喜びは、私たちの会がこんなにも温かい雰囲気を持っている、こんなに素晴らしい一体感を持っているという幸福感に包まれました。会は、わたしにとって宝物です。

皆さん、本当にありがとうございました。これからも、皆さんとともに、このつながりを大切に、子どもの学びに向き合っていきたいと思います。